一つの伝記論 (7)

安　達　肆　郎

目　次

序
一
二
三　利用された伝記
四　好事家的伝記
五　文学的伝記
六　歴史的伝記
七
八　自己目的的・自足的伝記 (1)
九　自己目的的・自足的伝記 (2)
十
十一
十二
十三
十四……本号

十四

「本来の伝記に関する基本的問い」の第二は、「伝記は人間にとって本来如何なる意味をもつか」である。

この問いはさしあたり、「伝記」に直接関係する人々にとって、「伝記」が本来何を意味するか、を問うているのである（第十六章参照）。

さて、「『伝記』に直接関係する人々」は、主人公と筆者と読者である。このうち、主人公にとっての「伝記」の意味は、筆者、読者にとっての意味のうちに、いわば裏返えされたかたちで含まれると考えてよい。また、筆者にとって「伝記」が何を意味するかは、第十二章で詳述した。（筆者にとって「伝記<自己目的的・自足的伝記>」を書くことは、主人公そのひとに対する自分の人間的信仰を確認することであり、「伝記」そのものは、自分<筆者>の主

人公に対する人間的信仰の証である。）

それで、残るところは、「伝記」は読者にとって本来何を意味するかのみである。結局、「本来の伝記に関する基本的問い」の第二は、「本来の伝記（自己目的的・自足的伝記）」は、読者にとって、何を意味するか、である。

1

先章（第十二章）でみた様に、「本来の伝記」の筆者は、主人公そのひととの出逢い経験（共感）を原動力とし、その「出逢い」を自分自身に確認し、人々にもそのことを示す為に、また自分が出逢った主人公を人々（読者）に伝えることを希って主人公の伝記を書く。

してみると、「本来の伝記」は、読者にとっては、主人公そのひとと出逢う、即ち主人公そのひとを共感する場である筈。

この回答は、「本来の伝記」が読者にとっても彼の生き方にかかわることをよく示している（第十六章参照）。というのは、ここにいう「主人公そのひとへの共感」が、ひとの生き方と深いかかわりをもつことは、先に（伝記の筆者の場合について）みた通りであるからである（第十二章参照）。

しかし、右の回答は、まだ筆者の側からみた形式的な回答にすぎず、不十分である。「本来の『伝記』に関する第二の問い」に、具体的・実質的に回答するには、もう一歩立ち入って、いうところの「主人公を共感する場にある」ということが、読者自身にとってはどういうことなのかを読者の側から、読者の経験に即して具体的に示さねばならぬ。

しかし、それを示すには、まず「本来の伝記」の読者が実際に如何にして主人公そのひとを共感するに至るか、その次第を省みなければならないであろう。

2

「本来の伝記」の読者は、如何にして主人公そのひとを共感するに至るか——。その経緯の解明が当面の課題である。

さて、「本来の伝記」の筆者は、「主人公との出逢い」を自分で確認する為に伝記を書く。具体的にいうと、筆者は、伝記において、主人公の生涯の生き方を辿り、それを生きる主人公の魂にふれ、終に主人公そのひとと再逢する。

否、筆者は、伝記を書くその一歩一歩に主人公と出逢って(再逢して)いる。「伝記」は、筆者にとって、いわば主人公との「出逢い」が行ぜられる場である(第十二章参照)。

それ故、「本来の伝記」の叙述には、その一歩一歩に、主人公そのひとに対する筆者の深い感銘がこめられることになる。

結局「本来の伝記」には、a.主人公そのひとの生き方を示す彼の生涯に亘る生々しい生活と、それを生きる主人公そのひとの魂の息吹き、魂の真実とが記され、b.更に、主人公そのひとに出逢った筆者の深い感銘がこめられている(第十二章参照)。

この様な「伝記」を読んだ人々が、主人公そのひとを深く感得し、心を動かさぬ筈がない。

そのうえ、「本来の伝記」は先述の様に、先に小論で分類した「各種の伝記」とは異なり、ただ主人公との出逢い経験(共感)を原動力とし、それによって貫かれていて、筆者の他の目的、狙い、好み等による不純な要素を含まないから、そこには筆者の主人公に対する共感の思い(感銘)が妨害されずに、純粋に且つ強く吐露されている筈。それだけ、これを読む人々の主人公に対する感動は、深く心底に到るに違いない。

しかし、例外を除いて、主人公そのひとに対する読者のこの様な感動が、すぐ主人公そのひとに対する「共感(出逢い)」につながるわけではない(後述参照)。

では、「本来の伝記」を読んで主人公そのひとへの「共感(出逢い)」に至る人々は(ロマン・ロランは先述の様に、彼の『ベートーヴェンの生涯』について、その様な人々<読者>の実例をあげていた)、どの様にして「共感」に至るのであろうか——。その次第は、人によって異なり一様ではないが(後述10節参照)、次に、普通によくみられる実例について、その大筋を省みよう。

「本来の伝記」を読んで、普通の読者はまずその叙述にこめられた筆者の感銘(主人公そのひとに対する感銘)を同感する。(読者の中には、この様な「同感」を経ずに、いきなり主人公の生き方、魂の真実に直接する人がある

が、この様な場合は一般的ではない<後述10節参照>。一般の読者においては、右の「同感」が主人公そのひとへの「共感」へ至る第一歩である。）

ここにいう「同感（Sympathy—Syn <same>＋pathos <feeling>）」は、性格的には受動的で、筆者の感銘（主人公そのひとに対する感銘）を感受する（受け容れる）にすぎない。

しかし、「同感」は、内容的には、筆者の「主人公に対する感銘」の同感であるから、「同感」によって、読者は間接に主人公そのひとを感受しているといってよい。もっとも、この間接に感受された主人公への感銘は、元の感銘（筆者が主人公との出逢いにおいてえた感銘）とは全く異質で、それとは別ものである（第十二章参照）。元の感銘と区別していうなら、同感された感銘は、実は読者の感慨にすぎない。

では、この様な「同感」から、読者が主人公そのひとへの「共感(出逢い)」へ至ることは如何にして可能か——。それが問題である。

しかし、問題といえば、抑々、読者が筆者の感銘（主人公そのひとに対する感銘）をそのまま「同感する(受け容れる)」にはどうすればよいのか、それがまず問題であろう。

先に、普通一般の読者が主人公への共感へ至る第一歩は、筆者が伝記の叙述にこめた感銘を同感することだといったが、その「第一歩」が既に問題なのである。「本来の伝記」の場合、筆者が叙述にこめた感銘を「同感する（そのまま受け容れる)」ことは、読者にとって、おのずから可能なことではないからである。

3

小論第三章以下でみてきた様に、「伝記」は様々の立場で書かれる。同様に、「伝記」は様々の立場で読まれる。「本来の伝記」も、人々は様々の立場でこれを読む。（例えば、これをただの文学作品として、歴史研究の資料として、様々の教訓や模範として、時には身過ぎ世過ぎの術の手本として、また好事家的興味や好奇心から物語りとして、或は主人公のモニュメントや主人公を偲ぶよすがとして等々。）

a．この様に諸種の立場で「本来の伝記」を読む人々は、主人公の生涯を特定の視点（立場）からみている。その様な「みる眼」で読まれることによって、筆者が彼の感銘（主人公そのひとに対する感銘）をこめた生涯の叙述は、その生気を喪い、干からびた残滓となる。筆者の全人を以てした感銘は、特定の視点からは見えないからである。そもそも見えないものだからである。

結局、生涯の叙述にこめた、筆者の全人をあげての感銘は、この際、読者に感受されることなく見過ごされる。

b．もっとも諸種の立場で「本来の伝記」を読む読者の中にも、自分の立場（目的、狙い、好み等々）とは無関係に、主人公の生涯（生き方）に対して、自分の立場を介さない直接の関心をもつ場合があるが、その様な関心は、――直接の関心とはいっても――、一方に「目的」や「狙い」をもった読者のいわば片手間の関心で、彼の全人をあげての関心ではなく、不純だから、この様な読者によっては、筆者が主人公の生涯の叙述にこめた、彼の全人をあげての深い感銘は、そのままは感受されず、部分的にしか伝わらぬか、または変質してしまう。

結局、諸種の立場で「本来の伝記」を読む人々は、彼等が予めもっている立場に妨げられて、筆者の感銘を「同感する(そのまま受け容れる)」ことはできない。

（もっとも、この様に諸種の立場で「本来の伝記」を読む人々は、伝記を「伝記」として、少なくとも「本来の伝記」（「自己目的的・自足的伝記」）として読んでいる訳ではないから、厳密には彼等を、ここに問題にしている「本来の伝記の読者」と呼ぶことはできないであろう<後述>。）

この様に、はっきり意識して諸種の立場で伝記を読むのでなくても、われわれは無意識のうちに、いろいろの思わく（先入見――例えば、主人公や筆者についての先入見、主人公が生きた時代や地域についての先入見、抑々「伝記」そのものについての先入見等々）を以て伝記を読む場合が多い。

この場合にも、筆者の全人をあげての感銘は、――諸種の立場で読む読者の場合ほどではないにせよ――、その思わくに妨げられて、そのままは読者に受

け容れられず、見過ごされるか、曲げられるか変質することになる。

読者の「思わく」と、前述した「特定の立場」とが無意識のうちに結合する場合がある。

例えば、「本来の伝記」の読者が、とかくもち易いのは、「本来の伝記」を単なる作品とみなす思わくである。この「思わく」は、伝記を文学や史料等として読む立場と無意識のうちに結合している。それでこの様な「思わく」で伝記が読まれるとどうなるか——。

「伝記」は、単なる作品とみなされることによって、作品としてそれ自身がもつ価値によって独り立ちし、独り歩きをする様になる。例えば、ただ文学的価値、史料的価値、諸種の利用価値をもつ所謂「作品」として、それぞれの広場に投げ出され、ただその価値によって観照され、批評され、享受される。

こうなれば、もう筆者が誰であるかは問題ではない。

結局、単なる所謂作品とみなされることによって、「本来の伝記」は筆者との個人的（実存的）絆を断たれる。その様な絆は、所謂作品の価値と関係がないからである。[1] こうして、まず、

a．筆者が「伝記」の叙述にこめた、彼の全人をあげての、それだけ個人的（実存的）な感銘は息の根をとめられて、叙述は生気を喪う。そして、

b．この際、読者自身は、単なる作品の価値の観照者、批評家、享受者となる。彼はいまや、ただ作品の価値しか受け容れることができない。

結局、伝記を単なる「作品」とみなす思わくは、主客両面から、読者が筆者の全人的な感銘を「同感」することを不可能にする。また、この場合、読者は意識して特定の立場をとるわけではないが、「伝記」を単なる作品とみなす先入見、即ち特定の構えを以て「伝記」に接する為に、無意識のうちに伝記を文学、歴史等の立場で読むことになるから、その点からも「伝記」にこめられた筆者の全人をあげての感銘を受け容れることができないのである（第十五章１節参照）。

畢竟、筆者の感銘を「同感する（そのまま受け容れる）」には、読者は虚心に

ならねばならぬ。ここに「虚心になる」とは、上述から明らかな様に、諸種の目的、好み、狙い等々自分の立場を捨て、また諸種の思わく（先入見）を捨てることである。具体的にいえば、伝記を特定の視点から見たり、特定の先入見（構え）を介して伝記に接することをやめ、自分の全人を以て、伝記に直接することである。

4

しかし、「本来の伝記」の読者は、ただ虚心になりさえすれば、筆者の感銘を「同感」しうるのであろうか——。

その様に考えるのは、形式的には正しいが不十分である。「虚心になる」ことによって、筆者の全人をあげての感銘（主人公に対する感銘）は、形式的には、そのまま受け容れられる筈だが、「本来の伝記」の場合の様に、筆者の全人をあげての深い感銘（主人公そのひととの出逢いの際の感銘）をそのまま受け容れるには、読者の側に、「虚心になる」だけではすまぬ、こころの深さが要求されるからである。

筆者の全人をあげての深い感銘を「同感」するには、ただ「虚心になる」だけでなく、読者が積極的に自己を深める為の精進、工夫、忍耐が必要である。(2)

「本来の伝記」の筆者が、伝記の叙述にこめた感銘は、これを譬えれば、絵の制作の際、画家が「写生」にこめた感銘（写生された風景や人物に対する感銘）の様なものであろうか——。

奥村土牛氏は、自伝の『牛のあゆみ』や近藤啓太郎氏との対話の中で次の様にいう。

「写生をして、それに基づいて下絵をつくり、それから本画をつくると気が抜ける。(3)」「踊り子」の場合は、そういう「下絵を作らずぶっつけ本番だった。(4)」「踊り子はいきなり木炭でやった。……鳴門もそうだ。(5)」

ここに「気が抜ける」とは、描かれた風景や人物に対する画家の深い感銘が喪われるということであろう（後述参照）。

しかし、土牛氏によると、「写生」は生の風景の生気（風景に対する画家の

感銘）をたたえているが、それ自体は「人が見たら符牒かと思うかも知れぬ様な」もので[6]、写生した当人にしかわからぬ場合が多い。（「雄大でまた神秘的である渦潮を見ていると、描きたいという意欲がおさえ難くわき上がってきた。……まるで人が見たら符牒かと思うかもしれぬような写生を何十枚も描いた。そして同時に、その時の新鮮な印象を頭の中に刻みつけた。……しかしやはり、いざ制作となると、頭脳の中から印象を掘り出し掘り出しするのは苦労であった。あまり例のない描き方であったが、こうして描くより仕方なかった[7]。」）

土牛氏が、「写生」から下絵をつくり、それから本画をつくると、「気が抜ける」と告白するところをみると、「写生」にこめた作者の深い感銘は、普通の手続きによった所謂作品には現われない（含まれない）ものなのである。

しかし、土牛氏はまた「踊り子」や「鳴門」の様な特別の絵には、単なる作品以上の「気」がこもっていることを認めてもいるのである（前述）。

そこで、われわれがその特別の絵を十分に享受するには、これを単なる作品とみることを止めて、その絵のもとになった「写生」にこめられた作者の「気」（感銘）を同感する様にしなければなるまい。

しかし、土牛氏は、それらの「写生」は、普通の人には「符牒」の様にしかみえまい、という。

「写生」は、作者が始めてその人物や風景に出逢って深く感銘し、それを描きたいという意欲がおさえ難くわきあがってきた際、その深い感銘と意欲をこめて描きとめたもの、いわば作者の個人的（実存的）な感銘（気）と意欲の象徴だから、その様な作者の感銘を感受（感得）しえない普通の人々には、わけのわからぬ「符牒」の様にしかみえまい、というのである。畢竟、絵画の場合でも、「踊り子」や「鳴門」の様に、単なる作品以上のもの（作者の個人的・実存的な深い感銘）を含む絵を十分に享受するには、人はただ虚心になるだけでなく、自分を深めて、作者が「写生」にもとづいて、その絵にこめた全人をあげての深い感銘（気）を同感（感受）しえねばならぬ。

絵画ばかりでなく、一般に芸術や文学においては、作品の奥に、単なる価値に還元しえない底の、作者の個人的・実存的な深い感銘が含まれている（こめられている）場合が多いのではないか[8]――（註(1)参照)。

とまれ「作品」の単なる観照者に留まらず、作品をより深く享受するには、作品の奥にそれを見抜き(直観し)、それを感受することが、みる者にも読者にも要求されるのではないか――。しかし、その為には、まず、みる者自身、読者自身が自分を深めることが要求されよう。

しかし、ここで注意すべきは、

1. みる人や読者が精進工夫によって自己を深めて、作者、筆者の感銘への「同感(感受)」を徹底することは、芸術や文学の場合は、作品をより深く享受する為の望ましい条件であるが、「本来の伝記」の場合は、読者がそれを正に「本来の伝記」として読む（主人公に対する筆者の感銘を同感し、終にはそれを縁として主人公そのひとへの共感へ至る）為の不可欠の条件の一つであることである（後述及び第十六章参照)。

2. また、ここに同じく作者、筆者の感銘といっても、画家の、風景、人物等に対する感銘や文学者の作中の人物に対する感銘と、「本来の伝記」の筆者の主人公そのひとに対する全人をあげての感銘とは異質であることである（後述第十五章１節参照)。

5

しかし、虚心になり、精進、工夫、忍耐によって自己を深めても、「本来の伝記」の読者が、それによって到達しうるのは、筆者の感銘（主人公に対する感銘）への同感までであって、主人公そのひとへの直接の共感（傾倒）ではない（前述)。

では、先述した「『本来の伝記』は、読者にとって主人公そのひとへの共感の場である」とは、一体、如何なる意味なのか――。「本来の伝記」の読者は、「同感」から、更に如何にして主人公そのひとへの共感へ至ることができるのか――。それが次の問題である。

さて、この問題を考えるに先立って、まず、1. この様にわれわれが区別する所謂「共感」と「同感」とは、それぞれどういうことなのか、また、2. 両者はどの点で異なるのか、また、3. 普通の読者の経験において、両者はどの様なかかわりをもつかが示されねばならぬ。

次に、右の諸点を「本来の伝記」の筆者、読者の経験を分析して示そう。

1. a. 小論で「共感」と呼ぶのは、さし当たり「本来の伝記」の筆者と主人公との関係である。筆者が幸運によって主人公と出逢い、主人公そのひとを深く感銘し、全人をあげて彼に傾倒することである。更に具体的にいえば、筆者が主人公に出逢って、主人公そのひとによって自己の全人が根底から揺り動かされ、動かされつづける、そういう意味で、主人公そのひとを、自己存在の根底に担うことである(第十二章参照)。

b. この様な筆者と主人公との「出逢い」が、筆者の側からいえば、筆者の幸運によってえられた経験であることは先述の通りである(第十二章参照)。

「出逢い」は、筆者が希ってえられたことでも、つとめてえられたことでも、総じて筆者のはからいでえられたことではない。筆者はこの際、ただ、いわば、幸運によって届けられたものを受け止めたにすぎない。

c. 筆者の前述の様な「共感(傾倒)」の思い(主人公そのひとへの感銘)は、おのずから「本来の伝記」の叙述の行間にこめられる。第十二章で示した様に、「本来の伝記」を書くことは、筆者が、主人公との「出逢い」を、自分自身に確認すること(それ故、「叙述」そのことは、いわば右の「出逢い」を行ずる場)であるからである。そして、「本来の伝記」の読者は、この叙述にこめられた筆者の感銘(主人公に対する感銘)を同感するのである。

2. 「同感」は、ここでは先述の様に、「本来の伝記」の読者が、筆者の感銘を感受する(受け容れる)ことである。だから、「同感」の対象は直接には、筆者の感銘である。しかし、筆者の感銘は、主人公への感銘であるから、読者は、「同感」によって、筆者の感銘を介して、つまり間接に、主人公そのひとを感受し(受け容れ)ている。

a. しかし注意すべきは、「同感」によって感受された感銘(主人公に対す

る感銘）は、主人公に対する直接の、生の感銘とは、質を異にすることである。

その相違の端的な現れは、「同感」された感銘（以下、これを「感慨」と呼ぶ）は、読者のこころの強い緊張（「共感」が筆者の心にもたらした様な強い緊張）を伴わぬことである。

読者は、筆者の感銘を「同感」する際、それをひとごと（他人の事）として（自分とは関係のない筆者の経験として）意識する。この「意識」が、「共感」が筆者のこころに負わせた強い緊張から読者を解放するのである。

b．主人公に対する感銘が、「ひとごと」として受けとられることによって、読者は、「共感」から、いわば一歩身をひいてこれに対する。その為に、彼はまた「共感」の感銘（主人公に対する感銘）がもつ切実さ（自己の生き方との直接のかかわり）からも解放される。主人公そのひとは、ここではもはや、自己を根底から動かしつづける底の存在ではなくなる。読者（同感者）は、もはや主人公に直接し、彼を自己存在の根底に担うことはない。

とはいえ、読者は筆者の感銘を介して、間接に主人公を受け容れているから（前述）、彼にとっても主人公は自分の生き方とかかわりをもつ存在として意識される。ただ、主人公を切実に、自己存在の根底に担うのでなく、それから一歩身をひいて、いわば、自己存在の彼方に望見するのみである。

c．しかし、更に注意すべきは、読者（同感者）の「感慨」が、その周りにはっきりした「感慨」とはならない、いろいろの実感の群をもつことである。譬えていえば、灯火がその周りをとりまく光の輪（一種の暈）をもっている様に――。

読者は、筆者の感銘をひとごととして意識し、それから一歩身をひく。それに伴って、彼のこころでは、「感慨」の周囲に右述した「暈」がひろがるのである。「本来の伝記」のこころある読者は、多かれ少なかれ、この様な経験を免れることはできない。

3. 右の「暈」は、前述した「共感」と「同感」とのかかわりから生じたのである。

しかし、では如何にして生じたのか――。「同感」と「共感」との関係を、更に立ちいって示すために、次にその次第を省みよう。

読者が、筆者の全人をあげての感銘から身をひこうとする時、そうすることを読者に許さず、それを安易な態度として読者に迫り来る底のものが筆者の「感銘」には存する。そして、読者自身のうちにも、その追及を感得し、それに同調する底のこころが存する。

前述の様に、筆者の主人公に対する全人をあげての感銘が本来もっていたこころの緊張は、読者がその感銘を「ひとごと」として身をひく為に、読者には同感されないが、しかし、読者のうちには右の様なこころの動きがあるから、こころある読者は、それ（緊張）から全く解放されることはできない。

しかもこの際、右述した「こころの動き」は「緊張」だけでなく、「緊張」を通じて読者のこころに強い傷みをもたらす。

こころある読者が「同感」に際して免れることができぬ緊張は、いわば「共感」に際して筆者の身をやく緊張の炎が、読者にふきつける余焔の様なものだが、「余焔」は筆者の姿勢（全人をあげて主人公に傾倒する姿勢）から身をひき、それに伴うこころの緊張を免れようとする読者自身の安易さを責める外からの、同時に内からの声となって読者を責め、読者のこころを刺す。「余焔」が、読者のこころに、その様な傷みを実感させるのである。

「暈」は、筆者の感銘（全人をあげて主人公へ傾倒する際の感銘）への同感に際して、こころある読者が免れることのできぬこの様なこころの緊張と傷みの実感が、「感慨」に投影されて形成されるのである。

この様に解してよければ、「暈」は、結局、「本来の伝記」の心ある読者ならば、彼がいつも免れることのできぬ一群の実感（感得）である。そして、この「実感」は「感慨」の内容にかかわるよりも、むしろ、読者のこころの姿勢にかかわり、根源的には自己自身の安易さをせめる底の実感（傷み）である。しかも、外からの刺戟と同時に内からの声に基づいて、読者が感得する（せざるをえぬ）一つの実感である。

この様な「暈」が、「本来の伝記」の読者（同感者）のこころをいらだたせ不安にする。

伝記の読了後に、深い感動とともに、この種の焦燥、不安をおぼえた経験のある人が多いのではないか——。

6

以上、「本来の伝記」の筆者、読者の経験における「共感」と「同感」との相違を、両者を対比して示し、且つ両者の関係の一部を示したが、注意すべきは右述の様に、「同感」と「共感」とは、肝心の、伝記の主人公に対する態度において根本的に異質であることである。

さて、われわれは右に、「同感」と「共感」との相違と関係を明らかにする為の便宜上、「共感」と「同感」を、伝記の筆者と読者という二人（別人）の経験にふり分けて対比したが、前述の様に、当面のわれわれの課題は、同一人（読者）が、右述の様に全く異質な「同感」から「共感」へ如何にして至ることができるか、である。

先述の様に、「同感」を経て「共感」へ至る読者の実例がみられる。また、それに似た経験をする読者が多い。そこで、それが何か容易なことの様に錯覚される為であろうか、「伝記」の読者が、「同感」から「共感」へ如何にして至ることができるか、を問題にして追究した伝記論上の先蹤はない。しかし、後述する様に、この「問題」は、伝記論上困難な、しかし見過すことのできない問題の一つである。

それで、右の「問題」の(1)要点（急所）と、(2)伝記論上のその重要性を明らかにする為に、――同感者と共感者のこころの姿勢に注目して、――次に、もう一度「同感」と「共感」との相違と関係をやや立ち入って考察しよう。

1. 前述の様に同感者（読者）は、筆者の感銘（主人公に対する感銘）を受け容れるから、同感者も間接には主人公に接しているが、その際、同感者は筆者の感銘を、ひとごとと意識し、そこから一歩身をひくから、主人公をいわば自己存在の彼方に望見することになる（前述）。

これに対して、共感者（筆者）は、主人公を自己存在の根底に担う（前述）。

「同感」をいかほど深めても、「同感」と「共感」とのこの違いは変らない。何故か――。

先述（第十二章）の様に、「共感者」（筆者）は、幸運によって主人公と出逢ったのである。「出逢い」は、希ってえられたのでも、つとめてえられたのでもない。総じて「共感者」のはからいでえられたのではない。「共感者」は、いわば幸運によって届けられたものを受け止めたにすぎない。それが、「共感者」のこころの姿勢である。

この様な姿勢で受け止められた主人公は、もはや自己存在の彼方に仰がれるのでなく、抑々自己存在の根底に担われることになる（第十二章）。

これに対して同感者（読者）は、「虚心」になり、自己精進、工夫、忍耐によって自己を深めて、筆者の感銘（主人公に対する感銘）を自分の内へ受け容れる。かくて間接に主人公を受け容れる。

この際、同感者は、自ら希って、またつとめて、自らのはからいで、ひと（他人—筆者）の感銘を受け容れたのである。ひいて、主人公を受け容れたのである（前述）。この際の同感者のこころの姿勢は、いわば、「おのれを頼む」姿勢である。「共感者」と「同感者」がこの様に、こころの根本姿勢を異にする以上、「同感」をいくら深めても「同感」と「共感」との相違は解消しない。

従ってまた、同じ一人の同感者（読者）が、その「同感」を深めることによって、主人公そのひとへの「共感」へ至る道はない。「共感」は「同感」の延長線上にはない。「同感者」（読者）が、主人公そのひとへの「共感」へ至るには、そもそもこころの根本姿勢を転換することが必要である。

してみると、前述したわれわれの問題——「本来の伝記」の読者が「同感を経て共感へ至ることは如何にして可能か」——の急所は、右の「根本姿勢」の転換は如何にして可能か、である。

2. われわれは「伝記」の読者が、筆者の感銘（主人公への感銘）への同感を経て、「伝記」の主人公そのひとへの共感へ至る実例を見聞している。（例えば、先述の様に、ロマン・ロランは、『ベートーヴェンの生涯』を読んで、ロランの感銘を同感して、ベートーヴェンそのひとへの傾倒へ至り、彼を、自分の生きることの支えとも伴侶ともした「偉大な一世代」<若人達>があったと

伝えている[9]が、今日では「本来の伝記」を読んで、主人公への共感へ至る例はむしろ少ない。しかし、その少ない人々の殆どが<例外もある——後述>筆者の感銘への「同感」を経て主人公への「共感」へ至った人々である。)

そこで、それは恰も、読者が、ただ、筆者の感銘への「同感」を深めることによって、おのずから「共感」へ至るかの様に思われる。また、われわれ自身が「本来の伝記」を読んで、主人公への共感に似た経験をするので、それはさして困難な道ではないかの様に思われてくる。従来、論者が「同感」から「共感」へ至る経緯に特別の注意を払わず、それを問題としなかったのは、一つにはその所為であろう。

しかし、右述の様に、「同感」から「共感」へ至るには、読者のこころの根本姿勢の転換が必要なのだとすると、人々の右の様な考えは間違いで、実際は、「同感」から「共感」へ至る道は険しいに違いない。後述する様に、実際には「伝記」の読者で、「同感」に止まって「共感」へ至りえない人が多いのはその所為であろう。

では、「本来の伝記」の読者は、実際に「同感」を経て「共感」へ如何にして至ることができるのであろうか——。その経緯の解明がわれわれの次の課題である。

この「課題」は、伝記論が避けて通ることのできない課題である。というのは、右の経緯の解明を俟って始めて、「伝記は本来人々(読者)にとって何を意味するか——」という問いに、十分に答えることができるからである(後述参照)。また、「伝記論」は、右述の様に、「同感」に止まって「共感」へ至りえぬ読者が多いという事実についても、それが何故なのか、を解明せねばならぬからである。

とまれ、次に節を改めて、その「経緯の解明」を試みよう。

7

前述の様に、伝記論上、上述した「経緯の解明」にとりくんだ先蹤はない。それ故、以下の解明は、全くの手探りでなされた私の一つの試論である。

さて、その方法であるが、 a. 先述の様に、ロマン・ロランは、「本来の伝記」の主人公に対する筆者の全人をあげての傾倒(共感)を、宗教信仰に対し

て、「人間に対する人間的信仰」と呼ぶ[10]。それで、筆者の「共感」が、この様に、「人間的信仰」と呼ばれていることに着目して、ここでは、読者が「同感」から「共感」へ至る経緯を、ひとが「宗教信仰」へ至るこころの経緯に準えて考えてみることにする。

b. また、「同感」を経て「共感」へ至った「本来の伝記」の読者の経験を、就中、読者が「同感」に際してせざるをえなかった内省(その際の彼の心情、心の動き)を、立ち入って(推量して)分析してみよう。

先に、「同感」と「共感」とを対比した際に、「同感」の特徴として、「感慨」(同感された主人公への感銘)をとりまく「暈」が存在することを指摘した。また、その際、「暈」を意識する読者(同感者)が不安になり、焦燥をおぼえることをも指摘した。

右の「暈」を意識する読者(同感者)がおぼえる「不安」、「焦燥」のうちに、読者が「同感」から「共感」へ至る経緯を解明するための有力な一つの手掛りが含まれている様に思われる。それで、まず「暈」の内容と性格を、ついで「不安」の性格と素性(生まれ――「暈」とのかかわり)を考察する。

1. まず、所謂「暈(かさ)」について――

先述の様に、「本来の伝記」の読者は、普通、まず伝記の叙述にこめられた筆者の感銘(主人公に対する感銘)を同感する。

ところが、この「同感」という読者の経験は決して単純な経験ではない。読者は、「同感」に際して、それに伴うはっきりした「感慨」にはならない様々のことを感得(実感)せざるをえないからである。その際、読者が感得した彼の様々の「実感」が集まって、彼の心中で「感慨(同感された感銘)」をとりまいて、その周囲に形成されたのが所謂「暈」である(5節参照)。

さて、まず「暈」の内容、即ち「暈」に合成された読者の「実感」は、如何なる実感であろうか――。

それを明らかにする手掛りは、「暈」に関する読者の種々の経験の他にはない。われわれは先に(5節参照)、先走って、「暈」の内容の一部及び「暈」一

般の成立及び性格について述べたが、ここで、改めて読者の「暈」に関する経験に即して、「暈」に合成された「実感」の内容とその性格を、――当面のわれわれの課題に関係する限りで――分析してみよう。（「感慨をとりまく暈」というのも、実は「暈」に関する読者の経験の一種である。ここでは、「暈」はただ一般に、読者が「同感」に際して、「感慨」とともに感得せざるをえなかった様々の実感の総体、むしろ合成体をさす。）

a．「暈」は普通「感慨」をとりまくものとして経験される。これは読者（同感者）が、筆者の感銘には同感しえない底のもの（「同感」を超えたもの）があることを予感（実感）していることを示している。（例えば、読者は「同感」に際して、主人公を自己存在の彼方に望見するが、それと同時に、読者は、筆者が共感し感銘している主人公は、その様な存在ではないことの予感<実感>をもつのである。その、「ではない」ことの予感が、「感慨をとりまくもの」として経験される。）

b．読者は「暈」を、いつでも（自分がいくら「同感」を深めても）「同感」に伴う底のものとして経験する。これは、読者が「暈」の性格について、「暈」が、「同感」の深浅にかかわらず、そもそも彼のこころの姿勢そのものに基づくものであること、従って、彼がこの姿勢をとりつづける限り免れないことを実感していることを示す（5節の3参照）。

c．読者は「暈」を、また自分（同感者）の足許から吹きあげる焔の余焔の様なものとして経験する。これは、主体的に読者が主人公に対する自分自身の態度に関して、間接に（直接には筆者の態度に関して）一種の実感をもっていることを示す。即ち、これは「感銘」の主である筆者のこころが、共感の強い緊張で充たされていること、その「こころの緊張」は、読者の「同感」を超えていることが予感されていることを示す。（具体的に表からいえば、「感銘」における筆者の主人公に対するこころ<態度>は、身を焼く焔の様な強い緊張のうちにあり、それは「感慨」における、主人公に対する自分<同感者>のこころ<態度>の様な、しらじらしいこころではない、それを超えたものであることの予感<実感>。）

以上、読者の経験に即してみた「暈」の内容は、1. 筆者の感銘（主人公に対する感銘）には、内容的にも、それを感銘する態度にも、読者の「同感」を超えるものがあることの実感（予感）であり、2. これらの「実感」がみな読者（同感者）がとりつづけるこころの根本姿勢にもとづくことの予感（実感）であり、3. 自分（同感者）の主人公に対する態度に関する読者の実感である。

2. 「不安」について——

「暈」が示す右述の様な様々の実感に促されて、読者（同感者）は、改めて自分のこころの姿勢を、更には、その様な姿勢に固執する自己自身の在り様を省みざるを得ないが、彼がそれを省みた時、彼が免れることができないのが不安、焦燥の感である。次に、「不安」の性格と素性を考察しよう。

a. 「不安」についてまず注意すべきは、その特異な性格である。

われわれは、例えば自分のいろいろの「はからい」について、挫折感をもつことがあるが、「挫折感」は人の全人をまき込まず、時には却ってそれが人を奮い立たせ、向上させる原動力となる。これに対して「不安」は、全人をまき込み、人を心底からゆさぶるが、彼を奮い立たせる底の力とはならず、彼のこころは根源からゆらぐばかりである。「不安」のその様な特異な性格は、その素性にもとづく。

b. 「不安」は、どこから、どの様にして生じるのか——。

「暈」が示す先述の様な実感に促されて自己を省みる時、読者はまず、「自分のはからい」の未熟さを思わざるをえない。「暈」の経験において、読者は、自分のはからいによる「同感」を超えるものがあることを、しかもいくら「同感」を深めても、それを超えるものがあることを実感していたからである。

しかし、読者（同感者）は更に、自分のはからいを頼むこころの姿勢そのものの未熟さを思わざるをえない。先に示した様に、読者は「暈」の経験で、いつも自分のこころの姿勢（自己のはからいを頼む姿勢）を筆者のそれと対比して、筆者のこころの姿勢には、自分のこころの姿勢を超えるものがあることを、いつも実感していたからである（前述1のb. c. 参照）。

c. 読者は、右の様な「自分のはからい」の未熟さ、「こころの姿勢」の未

熟さの内省に促されて、改めて、自己自身を省みざるをえない。即ち、その様に未熟なはからい、未熟な姿勢を疑うことなくとりつづけ、それを固執してきたおのれを頼む自己自身の安易さを省みざるをえない。

しかし、この思いは、実は、同感者（読者）が、「暈」の成立を不可避として意識した際、彼の心底には既に（筆者の全人をあげての傾倒に対して、おのれを頼む自己の安易さを責める心として）潜在していたものに他ならぬ（5節参照）。それがいま、改めて未熟なこころの姿勢をとりつづける自己自身への内省の結果として意識の表面に浮かび上ってきたのである。（そもそも「暈」は、先述の様に、読者が、筆者の感銘<主人公への全人をあげての傾倒>を同感する際、それをひとごととして、それから身をひく際、その様な自分自身を安易として責める読者自身の内からの声が、彼の「感慨」に投影されて成立したものである<5節参照>）。

d．自己のはからいの未熟さだけでなく、それを頼むこころの姿勢が問題とされ（その未熟さが省みられ）、更にそもそも、その様な姿勢を疑うことなくとりつづけ、それを固執したおのれを頼む自己自身の安易さ、やがて、空しさ（頼むべからざること）、結局おのれを頼む自己自身の空しさが内省されたいま、読者そのひと（全人）が根源的に拠りどころを喪う。彼が免れえない「不安」は、今や根源的に拠りどころを喪った読者そのひと（全人）の根底からの揺らぎであろうか——。（この様なものとして、「本来の伝記」の読者がいだく「不安」は、ひと<読者>の全人をまきこみ、彼を根底からゆるがすのである。）

畢竟、「感慨」をとりまく「暈」が存在しつづけること、またそれが不可避なことへの内省が、「本来の伝記」の読者を苛立たせ、いつも「暈」を免れえない自分のこころの姿勢の未熟さと、その様な姿勢をとりつづける「おのれを頼む」自己自身の空しさの内省が、彼そのひとを不安にするのである。

「本来の伝記」の読者が経験する「焦燥」「不安」の素性と性格が右述の通りだとすると、両者（殊に「不安」）は、読者が「同感」から「共感」へ至る一

つのきっかけとなるのではないか――。

8

われわれの当面の課題は、「本来の伝記」の読者が「同感」から「共感」へ至る経緯を解明することであるが、先述の様に、この「解明」の要（第一段階）は、「同感者」のこころの姿勢から「共感者」のそれへの転換がどの様になされるか、その次第を明らかにすることである（7節参照）。

以下、前述した読者の経験と体験（「暈」と「不安」）を手掛りとし、前節で試みたそれの分析の結果を踏まえて、右の「次第」の解明を試みよう。

第十二章で明らかにした様に、「本来の伝記」の筆者は、幸運によって主人公と出逢い、彼そのひとを共感し感銘する（人間的信仰）。

その際、「出逢い（共感）」そのことと、それを受け止める「共感者のこころの姿勢」とを区別して、「出逢い」だけを幸運によるとし、それを受け止めた「こころの姿勢」は、これを筆者自身のはからいによるものとすることはできない。その様な筆者自身のはからいから、「出逢い（全人をあげての傾倒）」の幸運をうけ止める姿勢が生れる筈がないからである（「信仰しうるのは、<既に>救われたことの証し」といわれる。「人間に対する人間的信仰」<「出逢い」>においても、このことは妥当する筈）。「出逢い（主人公への共感）」と、これを受けとめる「こころの姿勢」とは、幸運によって、いわば一挙に届けられる。

この際、（主人公との「出逢い」に関して）筆者の側に前提してよいのは、ただ右述の様な「幸運」をうけ止めるこころの素地（下地）のみである。「素地」のないところに、「幸運」はめぐまれぬ（「縁なき衆生は救い難し」と仏書にもいわれている）。「本来の伝記」の筆者は、おのずから（天性）その様なめざめたこころの「素地」を具えた人であったに違いない。

これに対して、「本来の伝記」の普通の読者（「同感者」）が主人公と出逢う（共感する）に至るのは、読者が「本来の伝記」を読んで、その様なこころの「素地」を具えるに至った場合である。問題は、「同感」から如何にしてその様な「素地」を具えるに至るかである。結局、「同感」から「共感」へ至る経

緯の解明という、われわれの課題の要点は、つきつめれば、読者がいかにして、右の「素地」を具えるに至るか、を解明することである。

主人公そのひとに出逢う幸運にめぐまれる素質は、何人もこれを持つと考えねばならぬ[11]が、実際にその様な「幸運」をうけ止めるこころの「素地」は（天性の場合はともかく――後述）、右の「素質」が何等かの機縁によって目覚めて始めて具わる。

さて、前述の様に「本来の伝記」の読者は、筆者の感銘への「同感」に際して、所謂「暈」を経験するが、彼はこの経験において、「自らのはからいの未熟さを、ひいて、おのれのはからいを頼む自らの「こころの姿勢の未熟さ」を、更には、疑うことなくそれを固執してきた、総じて「おのれ」を頼む自己自身の空しさを省みる（前述）。こうして、終に読者自身は、根源的に拠りどころを喪う。読者が感ずる「不安」は、今や根源的に拠りどころを喪った読者そのひと（全人）の根底からの揺らぎの実感に他ならぬ（前述）。

しかし、この際、読者はまだ「おのれ」を出たわけではない。先述の様に、「本来の伝記」の読者は、伝記にこめられた筆者の感銘（主人公に対する全人をあげての傾倒）への同感に際して、それに同調せず、それをひとごと（他人事）として、それから身をひいたが、右述した「不安」は、要するに、この「身をひいたおのれ」のうちの出来事にすぎないからである。

しかし、「不安」において読者は、「おのれ」を頼む自己自身を省みて、その空しさ（恃むべからざること）を実感しているから、彼はそれ（不安）を機縁としてその根源的な「空しさ」を自覚して、「おのれ」を出で、いわば「おのれ」の在処を省みる底の心情（「宗教心」に類する心情）に至るに違いない。

「おのれ」を出で、「おのれ」の在処を省みるこの様な心情の上に、始めて、「出逢い」を届けられたものとして受けとめるこころが根づくに違いない（『歎異抄』にも、「おのれ」を恃まず、「おのれ」が救われ難い存在であることを思う「悪人」こそ「往生の正因」とする所謂「悪人正因」の教えがある[12]）。

してみると、読者（同感者）のこの心情こそ、彼が「出逢い」の幸運を受け止めるこころの素地である。出逢いの幸運にめぐまれる読者の素質が、「不安」

を機縁として目覚めるのである。[13]

結局、「本来の伝記」の読者は、筆者の感銘への「同感」に伴う「暈」の経験と、それへの内省の結果として生じた「不安」の実感を機縁として、主人公そのひととの出逢いの幸運を受けとめるこころの「素地」を具えるに至り、いわば「出逢い」の幸運と有縁な存在となるのである。

以上、「本来の伝記」の読者が、筆者の感銘への「同感」を経て、主人公への「共感」へ至る場合について、その「同感」から「共感」へ至る経緯の中心をなす、同感者のこころの姿勢から共感者のそれへの転換の「素地」が如何にして実現するかを示した。

注意すべきは、ここに解明した転換の「素地」の実現は、読者が「同感」を経て主人公そのひとへの「共感」へ至る経緯の第一段階にすぎぬことである。「転換の素地」が具わったからといって、直ぐに「転換」がおこる（「出逢い」を、幸運によって届けられたものとして受け止めるこころが具わる）わけでも、主人公との「出逢い」の幸運にめぐまれるわけでもないからである（第十二章参照）。

では、「転換の素地」の実現から「共感」へ至る経緯の第二段階は、どの様なものであろうか——。

9

さて、前述の様に「同感者」のこころの姿勢から「共感者」のそれへの転換の素地が具わったとしても、こころの姿勢の転換自体は、主人公そのひととの出逢い（共感）とともに、幸運によって、いわば一挙に読者に届けられる他はない。その点は、読者の場合も先述した筆者の場合と同じである（第十二章参照）。

とはいえ、「本来の伝記」の読者は、主人公との出逢い（共感）に関して、いわば虚空に投げ出されている訳ではない。

「本来の伝記」の読者の前には、筆者によってなされた主人公の生々しい生き方の叙述があるではないか——。そしてそれが、その生き方を生きる主人公そのひとの魂の息吹きと魂の真実を伝えてくるではないか——。読者は、いま

や、筆者の感銘を介さずに、直接主人公のその「生き方」に触れ、その「魂の息吹き」「魂の真実」を感得することもできるのである(第十二章6節参照)。

無論、そのことが、読者が出逢いの幸運にめぐまれる原因でも条件でもない。主人公の生き方の叙述を読むのでなく、現実に主人公に常に接していてさえも、主人公そのひとに出逢うとは限らない。況んや、間接にいかほど主人公に接していても、それが出逢いの原因とはならぬ。例えばロマン・ロランは、自ら告白する様に、幼年期以来ベートーヴェンの音楽、彼の生涯の生き方に接し、様々の教訓や励ましをうけていた。いわば、間接には早くからベートーヴェンに接していた。しかし、小論第八章で詳述した様に、1901年、彼がパリでベートーヴェンに出逢うまで、ベートーヴェンはロランにとって人間的信仰の対象<出逢ったひと>ではなかった。ベートーヴェンそのひとに出逢い、彼を自己存在の根底に担うことはなかった(第八章5、6節参照)。

しかし、「本来の伝記」の前述の様な叙述を読むことは、特に「こころの姿勢の転換の素地」を具えた読者の場合、彼がこころの姿勢を転換し、主人公そのひとを共感する(出逢う)という幸運にめぐまれる一つの機縁にはなるに違いない。

結局、「本来の伝記」に記された主人公の生き方、それを生きる主人公そのひとの魂の息吹き・魂の真実に接したことが、共感へ至る原因なのではない。読者は、ただそのことを一つの縁として、出逢いの幸運にめぐまれるにすぎない。(14)

以上、第5節以来、「本来の伝記」の読者の経験の中、普通によくみられる場合、即ち、筆者の感銘(主人公への感銘)への「同感」を経て主人公そのひとへの「共感」へ至る場合について、その「経緯」を問題にし、それの解明につとめてきたが、「経緯」の大要は、以上の様なことであろうか——。

(読者が「同感」を経て「共感」へ至る経緯を解明する際に、一つには分析の便宜上、「経緯」を二段に分けた。即ち、「同感」から読者のこころの根本姿勢の転換の「素地」がえられるまで、「素地」の具現から「共感」へ至るまで。

分析の内容に即して詳言すると、「本来の伝記」における筆者の叙述——主

人公の生涯に亘る生き方の叙述――に対する読者の感得を二種<二段階>に分け、各段階で別々に読者の心情を次の様に分析した。即ち、第一段階では、読者は「筆者の叙述」から、まず、そこにこめられた筆者の感銘<主人公への感銘>を感得<同感>し、そこに生じた「感慨」をめぐる「暈」を経験する。それが縁となって、幸運を受け止めるこころの「素地」が実現する。読者はまた第二段階では、同じ「叙述」から、主人公そのひとの独得の生き方と、その生き方を生きる彼の魂の息吹き、魂の真実を感得する。そして、それがもう一つの縁となって、終に主人公そのひとへの共感へ至る。

無論、読者自身が、この様な経緯やその段階の区別を意識することはないであろうが――。

なお、「同感」から「共感」へ至る経緯をこの様な二段階に分けたのは、ただ分析の便宜の為だけでなく、一つには後述の様に、読者の中には「本来の伝記」を読んでも、ただ筆者の感銘への「同感」に止まって、主人公そのひとへの「共感」へは至らない人があることを考慮してのことである<後述参照>。)

10

この章の目的は、読者にとって「本来の伝記」は何を意味するかを明らかにすることである。

以上2節から9節まで、「本来の伝記」を読んで、読者が主人公への「共感」へ至る経緯を解明してきたのも、それによって、読者にとっての「本来の伝記」の意味が、より具体的になることを期待してのことである。

以下、前節までに試みた「経緯の解明」の結果を踏まえて、読者にとって、「本来の伝記」は何を意味するかを改めて考察しよう。

さて、「本来の伝記」の読者が、主人公そのひとへの「共感」へ至る道は一様ではない。いままで、その中の一つで、普通によくみられる道（筆者の感銘<主人公への感銘>への「同感」を経て主人公への「共感」へ至る場合）について、その経緯を解明したが、読者の中には、これと異なり、筆者の感銘への「同感」を経ず、即ち、「伝記」にこめられた筆者の感銘を素通りして、直接、「伝記」に記された主人公の生涯に亘る生き方に接し、それを生きる主人公の

魂の息吹き、魂の真実に触れて、それを縁に、忽ち主人公に出逢う（「共感」する）人もあろう。

（この場合、読者には主人公と出逢う「素地」＜こころの姿勢を転換する素地＞が――「同感」に俟つことなく――天性具わっていて、「伝記」に記された主人公の生き方や魂の息吹き、魂の真実に触れて忽ち出逢いの幸運にめぐまれたのだ、と解する他はない。人が宗教信仰へ入るのにも、同様の場合があることが知られている。）

しかし、また中には、筆者の感銘への「同感」にとどまり、終に主人公そのひとへの「共感」へは至らぬ読者もあるに違いない。

否、そもそも、所謂「同感」へも至らぬ読者もあるのではないか――。

この章の冒頭、「本来の伝記は、読者にとっては、主人公への共感（出逢い）の場である」といったが（1節参照）、この様にみてくると、読者が所謂「共感の場にいる」（「本来の伝記」を読む）からといって、直ちに彼が主人公そのひとへの共感へ至るとは限らぬのである。「本来の伝記」は、読者にとって、「主人公への共感の場」ではあっても、「共感」を保証する（「共感」を必ず可能にする条件を含んでいる）わけではないのである。では「主人公への共感の場」とは、具体的には何を意味するのか――。

それを明らかにする為に、「本来の伝記」が、主人公そのひとへの「共感」に関して、読者に何を提示していたかを――先に分析したところを踏まえて――省みなければならぬ。

a．「本来の伝記」の叙述には、みな主人公に対する筆者の感銘がこめられている。その「感銘」への「同感」が読者の素質（「共感」の幸運を受けとめる素質）を目覚めさせ、素質を「素地」にする縁（きっかけ）となる（8節参照）。

b．「本来の伝記」は、主人公の生涯の生き方と、それを生きる主人公そのひとの魂の息吹き、魂の真実を伝える底の叙述を含む。その「叙述」が、既に「素地」を具えた読者が幸運（主人公に出逢う幸運）にめぐまれる縁となりうる（9節参照）。

先にわれわれが分析した限りでは、「本来の伝記」は、これ以外に直接「共

感」を必ず可能にする様な条件を含んでいるわけではない。

してみると、「本来の伝記」が主人公への「共感」に関して読者に提示するのは、何れも「共感」へ至る縁である。読者は、それを縁として、彼等の「共感」への素質を目覚めさせ、また出逢いの幸運にめぐまれうる。「本来の伝記」が「主人公への共感の場である」というのは、具体的にはそれ以外、以上のことを意味しない。然し正にそのことが、読者にとっては、彼の生き方にかかわり、彼の心を刺す「刺」となる（1節、5節、第十六章参照）。

結局、読者が主人公そのひとへの共感へ至る経緯を具体的に考察した結果を踏まえていえば、「本来の伝記」は読者にとって、ただ、彼が主人公への共感へ至る「縁」を含んだ共感の場である。

もし、主人公への傾倒（共感）を、ロマン・ロランの様に、「人間（主人公）に対する人間的信仰」と呼ぶなら、読者にとって、「本来の伝記」は、――それが果たす役割りからいって、――主人公そのひとに対する人間的信仰の「福音書」であるといえようか[15]――（第十六章参照）。

（「読者にとって、『本来の伝記』は主人公への共感の場である」ということの意味が、右述の通りだとすると、先に第十二章で述べた「本来の伝記」の筆者の第二の希い＜「自分が出逢った主人公そのひとを読者に伝えたい」との希い＞に関しても次の点を注意せねばならぬ。

筆者が右の「希い」を達成するためになしうるのは、ただ、読者が主人公への共感へ至る縁を含んだ場を提示することのみである。読者は前述の通り、自分の機根＜素質・素地＞と幸運によって、主人公への共感へ至るのであって、筆者が自分の「共感」を読者に追体験させるとか、況んや筆者が直接読者に主人公を共感させるなどということができる筈がない。）

――未完――

註

十四

（1） 山本健吉氏は、その著『芭蕉（その鑑賞と批評）』（新潮社、昭和52年）の「はしがき」で次の様にいう。

「鑑賞も批評も目標は作品であって、作家ではない。詩であって詩人ではない

のである。」（3頁）

「芭蕉のそれぞれの作品が作られた背後の生活と環境とをとりあげたのは、今日、芭蕉の私生活に対するこれだけの知識は得られるが、それがむしろ作品の純粋観照に対しては、切り棄てるべき知識としてここに提出しているのである。」（3頁）

「作品の解明を目標とした私は……その私生活や伝記の中には現われないが、詩のなかでは生命を持ち、意味をもっているものの究明に力を注ごうとした。作品の背後をさぐって、一人の人間の生活に到達するような探究でなく、多様な感情やイメージや言葉の微妙な複合体としての詩人の精神を探ろうとした。」（3頁）

辻茂氏は、『詩想の画家ジョルジョーネ』（新潮社、1975）の第一章で次の様にいう。「この書は、作品ばかりが真実として存在し、したがって、作品に較べればまったく仮の像でしかない人そのものよりも、作品そのものに関心の焦点を据えることを意図する。」（16頁）

この書では「作品以外の生涯や具体的な人となりは、重要度において二義的なものである。むしろ、それを切り捨ててこそ古来の伝記的美術史から新たな種類の美術史への飛躍も可能になろう。」（16頁）（ここにいう「新たな種類の美術史」とは、ヴェルフリン流の「様式」を中心にした美術史を指すのであろうか――。）

この様に主張する人々は、芸術品のうちに、価値以上のもの（価値に還元しえないもの）がこめられている場合があることを認めないのであろうか――（後註（8）参照）。

とまれ、美術史、文学史等の分野においては、この様に、作品を作者そのひとから切り離すという抽象（山本氏の所謂「純粋観照」）も可能であろうが、「本来の伝記」については、その様な抽象は不可能である。筆者から切り離すことは「本来の伝記」の息の根をとめることだからである（第十五章1節参照）。

（2） 1977年6月、旭川市で行われた岩波の文化講演「文学による回復」の中で、大江健三郎氏は、竹内好氏が「魯迅を読もうとする若い人達に与えた文章」を引用し、それを解説している。

「出会いは大切だが、出会いにいたる過程はさらに大切である。励まんかな若者たち」と竹内氏はいう。

大江氏はこれを次の様に解説する。

「魯迅と出会うことは大切である。誰もがそれによって自分の世界が大きく開かれてくる経験をするにちがいない。その本当の出会いにむかっての自己訓練、勉強の過程。基本から少しづつ魯迅を読みとってゆく、それを受けとめうる自分を鍛えていく。そのうえで魯迅をはっきり正面から読みうる段階に自分を押し上

げる。この過程こそが重要である。このような過程なしに、魯迅と機械的に出会っても仕方がない。苦しい自己訓練の過程があったあとで、はじめて出会いが真の出会いになる。それゆえにこそ、『励まんかな若者たち』と竹内好氏はいわれるのだと思います。」（岩波、「図書」1977年9月号。）

（3） 近藤啓太郎、『奥村土牛』、岩波書店、170頁。

（4） 同上、169頁。

（5） 同上、170頁。

（6） 奥村土牛、『牛のあゆみ』、日本経済新聞社、123頁。

（7） 同上、123—124頁。

（8） レオナルド・ダ・ヴィンチは、「モナ・リザ（ジョコンダ）」「若い洗礼者聖ヨハネ」「聖アンナの膝の上の聖母マリアとキリスト」を、終焉の地アンボワーズの「クレーの館」まで伴い、最後まで手許において手放さなかったという。

これはレオナルドが、それらを未完成と思っていたからだけではあるまい。恐らく、それらはレオナルドには、単なる作品以上のものであったのであろう。

（9） 前出、『ベートーヴェンの生涯』、13—14頁。

（10） 同上、18頁。

（11） 前出拙稿、「伝記者のこころ」結語（1）参照。

（12） 『歎異抄』でも、「自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこころかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず」とされ、おのれの悪行を悔い、煩悩具足の身なるを思い、何れの行も出離の縁とはなりがたく、結局、おのれが救われがたい存在であることを思う（魂の在処を省みる）悪人のこころに、始めて、如来の本願を信じ、本願をたのむこころが根づく、とされる。所謂「悪人正因」の教えである。

（13） 無論、「本来の伝記」の読者のこの様な「素地」を、宗教信仰者の素地と同一視することは許されない。「本来の伝記」の読者（筆者も）は、ここにみた様に、おのれの拠りどころにこだわり、全人を投げうって徹底的に、おのが魂の在処を省みるには至らないからである。「本来の伝記」の読者（筆者）の信仰が、なお、人間に対する人間的信仰に止まる所以である。

しかし、ここにみた「素地」は、ただおのれのはからいの未熟さや無力、おのれの安易さを省みるに止まらず、やはり、おのれを出でて、おのれの在処を省みる点で、本来の宗教心に類する心情と解してよいのではないか——。（文化としても、この様な「人間に対する人間的信仰」を原動力とする「伝記」は<第十二章参照>、宗教とは違った、文学や歴史とも違った、独得の意義をもち、独得の独立した文化領域を形成するのではないか——<第十六章参照>）。

（14） この様にして読者が至りえた共感（主人公そのひとへの共感）は、筆者の出逢い経験（共感）の追体験ではない。この場合の読者の体験は、筆者の共感（主人公への共感）をなぞったものではない。それは、読者自身が「同感」（筆者が「本来の伝記」の叙述にこめた感銘への同感）を機縁としてえた「素地」と、新たに

めぐまれた読者自身の幸運によってなされた体験である。

(15) 前出、ロマン・ロラン、「ベートーヴェンの生涯」18頁、参照。

「本来の伝記」がもつこの様な存在理由は、今日世に行われている「各種の伝記」がもつ存在理由（「文学の一ジャンル」「歴史叙述の一分枝」等々）とは別に、「伝記」が本来もっていた「伝記」独得の意義、独得の存在理由といってよいのではないか――。あるいは、むしろそれが「伝記」という独得の文化の正体なのではないか――。（後述、第十六章参照。なお、第十章、註(3)及び第八章、註(57)参照。）

アンドレ・シュアレスも、ロマン・ロランが書いた「ベートーヴェンの生涯」について、「福音書を書く様な態度でベートーヴェンについて書く権利を、私はロマン・ロランにだけ認容する。何故なら、彼は実際その精神で生きているのだから。」と語っている（前出「ベートーヴェンの生涯」pp. 193-194)。